

# ヘッベルの演劇論解釈の試み

——ヘッベルとハイペアの論争を中心として——

奥村 淳 (旧姓: 戸屋)

ヘッベル (1813-1863) のまとまった演劇論としては „Mein Wort über das Drama“ (1843) と „Vorwort zu Maria Magdalene“ (1844) が主なものである。ヘッベルも „Mein Wort über das Drama“ は「長年の思考の結果」(Br. II, 275)<sup>1)</sup> だとか、あるいは上の2つの論文は「全く新しい美学のための核」(Br. V, 51) を含んでいると述べている。小論では「ヘッベルのあらゆる哲学上、ドラマ理論上の思想を萌芽の形で含む」<sup>2)</sup> とされる „Mein Wort über das Drama“ を中心にしてヘッベルの演劇論の解釈を試みたい。

„Mein Wort über das Drama“ はデンマークの詩人で哲学者のハイペア (Johan Ludvig Heiberg: 1791-1860) との論争が大部分を占めている。1843年1月、コペンハーゲンに滞在していたヘッベルはシュトゥットガルトのモルゲンブラット紙に „Ein Wort über das Drama“ という短い論文を発表した。デンマークの新聞に訳出されたこの論文に対してハイペアは激しい批判文を発表した。ヘッベルは7月になってこの事実を知り、独訳されたハイペアの論文 „Die Aufgabe des neueren Dramas“<sup>3)</sup> を読んでただちに反論にとりかかり、8月上旬に初めの部分と併せて „Mein Wort über das Drama“ と名づけてハンブルクで出版したのである。<sup>4)</sup>

ハイペアは当時のデンマークの有名な詩人であり、コペンハーゲン大学の教授として文学やヘーゲルを講じ、また王立劇場の監督をつとめたこともある。彼を形容する「文学の法王」<sup>5)</sup> 「デンマークの文学上の権威」<sup>6)</sup> あるいは「デンマークのヘーゲル」(Br. II,

1) 使用したテキストは Friedrich Hebbel: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von Richard Maria Werner. 27 Bde. und Anhang. Berlin (B. Behrs Verlag) 1904-1907. 1. Abteilung (Werke und Schriften) は W., 2. Abteilung (Tagebücher) は T., 3. Abteilung (Briefe) は Br. と省略し、巻数はローマ数字、ページ数はアラビア数字で示す。日記は巻数とアラビア数字の番号で示す。なお W. XI においては S. 3-S. 39 は „Mein Wort über das Drama“, S. 39-S. 65 は „Vorwort zu Maria Magdalene“ である。

2) Meetz, Anni: Friedrich Hebbel. 2. Auflage. Stuttgart (Metzler) 1965, S. 32.

3) W. XV (=Anhang III: 以下では A. と省略) に転載されている。

4) „Eine Erwiderung an Professor Heiberg in Kopenhagen“ という副題がもつ。

5) Friedrich Hebbel: Werke. Hrsg. von Gerhard Fricke, Werner Keller und Karl Pörn-bacher. 5 Bde. München (Hanser) 1963-1967. Bd. 3, S. 947 (Anmerkung).

6) Matthiesen, Hayo: Friedrich Hebbel. Hamburg (Rowohlt) 1970, S. 60.

ハイペアによると宗教、芸術、科学はもはや無関係に各々の目標を追求せず、「ただひとつの目標に向かって一致しようとする」(A. III, 193) という。この目標とは「神的な Weltenlenker」の顕現である。ところがグツコウの場合には「実際の社会状態」(A. III, 193) が「神的な Weltenlenker」に代って人間を支配するものになっているのである。ハイペアは Realismus では「表現されたイデー」(A. III, 192) こそ重要であるとしているが、ハイペアをむしろ Idealismus に位置づけるのはこのような理由によるのである。

ヘッベルによれば「芸術と哲学は同一の使命を有している」(W. XI, 29) のであり、彼は当時支配的であったヘーゲルの「芸術の立場は克服された」(Br. VII, 69) という考えには反対の意見だったのである。<sup>12)</sup> ヘッベルは反論の部分でも「グツコウの作品のテーマは社会と戦う人間である」(W. XI, 23) と述べてグツコウを擁護しているが、しかし彼のグツコウ擁護の根本にあるのは社会と人間の対立性についての考えとは別のものであると思われる。ヘッベルは 1839 年 9 月にグツコウの „Wally, die Zweiflerin“ (1835) を再読して、この作品はメンツェルのいうように unsittlich なものでなく、「真実の精神が流れていて、精神的な体験がどのページにもある」(T. I, 1673) ので、メンツェルの攻撃は社会の真実に眼をつぶる Verstand の側からのものであると考えた。このようにヘッベルが重視するのは真実であり、彼がグツコウに一定の評価を与えるのは、グツコウがハイペアの如く観念至上主義でない故なのである。そしてこのことは青年ドイツ派に対するヘッベルの態度を方向づけるものになっているのである。ヘッベルは同じ 9 月にヴィーンバルクの論文 „Die Dramatiker der Jetztzeit“ (1839) を批評した。そしてヴィーンバルクが「現代のドイツ文学は幽霊である。……フレッシュで若々しい生命は吸い尽されてしまい……」(W. X, 369) と考えて、いわば形式のみがもてはやされているとしたことに共感した。「生は常に沸き立っているのだ」し、個人の自由な展開が圧迫されるので「人間社会が国家という……形式を必要とするのはたしかに不幸なことである」(以上 W. X, 370) という。またヘッベルは 1840 年 1 月に Wilhelm Elias なる詩人の長篇小説 „Glaube und Wissen“ (1839) を批評した。Elias は青年ドイツ派を攻撃していると思われるが、彼は「精神の解放」でなく「肉の解放」をめざす「frivol な思想の所有者」(以上 W. X, 398) のことを、キリスト教信仰を土台にして非難した。これに対してヘッベルは「生の神秘的な Urstoff でなく、生が表現の対象である」(W. X, 397) と述べている。ヘッベルによると「ロマンやノヴェレは信仰告白ではないのだ」し、信仰という「柱のためにそれを支える大地を忘れてはならない」(以上 W. X, 399) のである。「大地」とは生であり、人間である。このように考えるとグツコウやヴィーンバルクに対するヘッベルの共感、彼らを含めた青年ドイツ派の国家観、社会観への賛同からというよりは、むしろ形式にとらわれない物の考え方や、生と人間を重視する態度への共感から生じたと思われるのである。しかもヴィーンバルクも同じような視点

12) Vgl. W. XI, 55, Br. IV, 8 und T. III, 3290.

からヘッベルの『ユーディット』、ひいてはヘッベルを賞賛したという。<sup>13)</sup>

そして『ユーディット』はメンツェル批判、ヴィーンバルク批評、Elias 批判とほぼ同時期の1839年10月から翌年1月にかけて書かれたが、この悲劇の執筆の動機を考えるならば、ヘッベルの関心のありかが明白になる。ヘッベルは聖書外典のユーディットは「狂信的でずるい怪物」(W. XI, 14) にすぎないと考え、もし人間ならば聖書のような結末にはなりえないとした。そして結末を聖書とは正反対にしたのである。彼は「人間本来の性質」に注目して、「人間は神の腕の中でさえ人間であることをやめない」(以上 T. II, 1989) と考えたのである。このようにヘッベルはユーディットの人間的な面に眼を向けたのであり、それ故に「ヘッベルが初めてこの素材の心理的な面を発見し発展させた」<sup>14)</sup> と評されるのである。ヘッベルのこのような志向は彼が詩人への道を歩み出したといえる1835年にすでに指摘できることである。この年彼はクライストを高く評価する論文 „Über Theodor Körner und Heinrich von Kleist“ を発表した。ここでヘッベルは、芸術は生を表現すべきだが、「生の単なるコピー」(W. IX, 34) では芸術になりえないと述べている。ヘッベルはヴィトコフスキーがいう如く「geistig=kulturell な価値」<sup>15)</sup> のみを一面的に高く評価する Idealismus 的な立場に反対し、クライストが「生の恐ろしい深み」(W. IX, 58) をよく洞察し表現したことを賞賛したのである。「詩人への道は人間を通ってのみ行く」(T. I, 746) はヘッベルの文学上の自戒である。彼は「世界は現実化されたイデーである」(W. XI, 56) と考えたが、<sup>16)</sup> しかしドラマでは決してハイペアのようにイデーのみを観念的に表現しようとはせず、「下位のエレメント」(W. XI, 54) としての世界である現実をまず描き、そこからイデーを浮き上がらせようとするのである。このエレメントがハイペアの退ぞけた「時代の下位の現象」と同類であることはいうまでもない。

ヘッベルは何をドラマ、とりわけ悲劇の使命としたのか。彼はヴィーンバルク批評で悲劇は宗教概念や運命概念から出発すべきなのに、ヴィーンバルクがそれを軽視したという不満を述べ、「人間の本性と人間の運命。——これがドラマの解こうとする2つの謎である」(W. X, 373) といっている。„Mein Wort über das Drama“ の中心思想もこれと同一である。この論文でもドラマとは「人間の本性と人間の運命」という謎を教えるものであり、「人間は……その本性と運命に従って永久に同一の人物であること」(以上 W. XI, 34) を証明するものだと言われている。つまりドラマの土台をなすのはあくまでも人間であり、その人間の本性と運命の表現がドラマの使命なのである。では人間の本性と運命とは何か。ヘッベルは „Mein Wort über das Drama“ の初めの方で

13) Vgl. Diebold, Edmund: Friedrich Hebbel und die zeitgenössische Beurteilung seines Schaffens. Hildesheim (Gerstenberg) 1978 (1928), S. 83 ff.

14) Hein, Jürgen: Aktualisierung des Judith-Stoffes von Hebbel bis Brecht. In: Hebbel-Jahrbuch 1971/72. Heide (Westholsteinische Verlagsanstalt Boyens), S. 65.

15) Wittkowski, Wolfgang: Der junge Hebbel. Berlin (Walter de Gruyter) 1969, S. 167.

16) Vgl. T. II, 3158.

次のように述べている。「生とは Maß を守ることができない個別的存在として罪をただ偶然に生み出すのみか、必然的かつ本質的に罪を含んでおり、その原因となるという永遠の真理」をドラマは示すものであり、「ドラマで表現される罪はキリスト教の原罪と同じく、人間の意志の方向から初めて生ずるのではなく、直接に意志そのもの、自我の執拗で自主的な拡張から発すること、だから主人公がすぐれた志向につまずこうと、あるいは非難すべき志向につまずこうとドラマ的には全くどうでもよいこと」(以上 W. XI, 4) を看過してはならないと述べている。結局人間の存在そのものが罪なのだということが人間の本性であり運命なのである。

ハイペアはヘッベルの罪概念を酷評した。原罪でもないのに意志の方向とは無関係に人間が存在するだけで罪になるなどという「混乱した概念」(A. III, 191) が生ずるのは、ヘッベルに「神的な Weltenlenker」の観念が欠如しているからだという。そのためにヘッベルは芸術の本来の目的を無視して「ドラマは生を表現するだけ」(A. III, 191) でよいと考えたのだというのがハイペアのヘッベル批判の骨子である。もし「神的な Weltenlenker」の理念があれば、そこから人間の行動を規制する「objektiv な諸力」が生じ、従って意志の方向を問わない罪はありえないということであると思われる。ところがこれに対してヘッベルはハイペアのいう罪など殺人、強盗などの特殊な罪にすぎないが、自分のいう罪とは「普遍的な罪概念」であり、自分が問題にするのは「ドラマ一般についてであって、キリスト教のドラマについてではない」(以上 W. XI, 30) と反論した。ヘッベルによるともし彼がハイペアのいうようなことを主張したのであれば、ドラマは何も表現できなくなってしまうという。何故なら「芸術はまさに普遍的なものと個別的なものの関係」を描くものであり、「もし個々人をまさに sittlich な世界秩序の一員として、最高のイデーがそこにおいて神秘に自己を表明しようとするモノドとして見ないと」(以上 W. XI, 27) 全くの個人しか存在しなくなるからであるという。そして「最高のイデー」のことを上と同じページで「神的な Weltenlenker」と換言しているのである。<sup>17)</sup>

人間は何故に存在そのものが罪であるのか。ヘッベルによると人間は Maß を守りえない故に罪なのであり、罪は「意志そのもの、自我の執拗で自主的な拡張」から生ずるという。そうすると人間は自我の拡張において maßlos なのであり、この点に罪の原因があると思われるのである。ヘッベルも「芸術は個別的存在をそれに植えつけられた Maßlosigkeit そのものによって何度も解体できてきたのであり、イデーをその不足した形式から解放できてきた。Maßlosigkeit に罪はあるが……」(W. XI, 29) と述べており、Maßlosigkeit に罪の原因がある。しかも人間は必ず maßlos な本性の持主なので

17) 両者は完全に同一とは思われないが、ヘッベルにおいては Gottheit, Idee, das Ganze, All, Universum 等が同一視されている面がある。フリッケはこのような表示の揺れに Romantik の影響を見ている。Vgl. Fricke, Gerhard: Friedrich Hebbel und sein Zeitalter. In: Studien und Interpretationen. Frankfurt / M. (Menck) 1956, S. 294 und S. 299.

ある。ヘッベルはここでイデーと個別的存在の二元論を述べているといえるが、ヘッベルによると個人は「最高のイデー」が自己表明するためのモノイドであるという。この考えは „Vorwort zu Maria Magdalene“ で「世界は現実化されたイデーである」とヘーゲ尔的に述べられる観念であると思われる。このようにヘッベルはイデーが自己を表明する世界、現実化されたイデーとしての世界を想定しており、人間もこの世界の部分になる。ヘッベルは個人のことを「イデーに行動あるいは存在そのものによって反抗する個人」(W. XI, 31) と説明している。以上のことを考えあわせると、人間は意志、自我を maßlos に拡張してイデーに対立、反抗することになると思われる。ヘッベルはこの対立、反抗そのものを罪としているのである。ヴィーンパルク批評に従うと人間が自己を「自分の存在のための中心」にして「世界の極点」(以上 W. X, 373) を否定することである。

リーペはヘッベルの罪概念を批判して、人間存在そのものが罪なら悲劇はあり得なくなるので「純然たる存在の罪の意味で無罪過で罪となる主人公」<sup>18)</sup> をヘッベルは作らなかったと述べている。リーペによると「罪を必然的に生み出すのは生そのものではなく、Maß を守ることができない個別的存在としてのみである」<sup>19)</sup> という。彼は人間の普通の Maß を越え出た偉大な人間の Hybris に罪の原因を見て、「ヘッベルの悲劇は根本において良心の悲劇である」<sup>20)</sup> と主張している。リーペのヘッベル批判はハイペアのそれに共通した面があるが、しかしヘッベルは「この罪は原初からの、人間の概念から分けることができず、そしてほとんど人間の意識にはのぼらない罪である。それは生そのものと共におかれている」(W. XI, 29) と明言しているのであるから、この罪は良心の決定の自由を超越したものなのである。しかしそうするともし人間が存在しないならば、イデーが自己表明とか自己の現実化を必要とせず、従って人間を必要としないならば、罪は存在しなくなるのではないかという疑問が生じて来るのである。しかも個人の存在はイデーを「不足した形式」にしてしまうことになるからこの疑問は強まる。ところがヘッベルは個別的存在は「直接与えられた事実として」(W. XI, 31) 受けとったのであり、イデーと人間の間の「Rißは何故に生じねばならなかったのか。これに対して私は決して解答を発見しなかったし、まじめに問う人でもだれも発見しないだろう」(W. XI, 32) と述べている。すなわち「罪の内的な理由は unentbüllt である」(W. XI, 31) という。このような考え方は一種のペシミズムであり、それはハイペアにも見られるヘーゲルの「オプティミズム」<sup>21)</sup> とはたしかに無縁であって、リーペがいうようにヘッベルとシェリングの近さを示すように思われるのである。<sup>22)</sup>

ペシミズム的な考え方はヘッベルの生涯をつらぬくものであるといつてよく、15歳の

18) Liepe, Wolfgang: Zum Problem der Schuld bei Hebbel. In: Beiträge zur Literatur- und Geistesgeschichte. Hrsg. von Eberhard Schulz. Neumünster (Wachholtz) 1963, S. 366.

19) Liepe: Hebbel und Schelling. A.a.O., S. 243.

20) Liepe: Zum Problem der Schuld bei Hebbel. A.a.O., S. 375.

21) Walzel, Oskar: Hebbelprobleme. Hildesheim (Gerstenberg) 1973 (1909), S. 42.

22) Vgl. Liepe: Hebbel und Schelling. A.a.O., S. 257.

ヘッベルがすでにノヴェレの „Treue Liebe“ (1828) で運命への服従を説いている。<sup>23)</sup> ヘッベルにとっては人間の必然的な罪の原因はある意味ではそれほど重要なことではなかったという面もある。ヘッベルは人間と神を区別し、人間を存在させるものは「悪」(T. II, 2179) しかないし、「善は種に存在し、悪は個々のものにしか存在しないのである」(T. IV, 5843) という。シュトルテは1950年代のヘッベル解釈を指して「ヘッベルをニヒリストだったと証明するのは……流行だった」<sup>24)</sup> と批判したが、そのような解釈を招く要素がヘッベルにあることは否定できないのである。しかしヘッベルはペシミズム的な考え方の克服の努力を十分にしているのである。ヘッベルはイデーと個別的存在のことを「存在の二元論的な形式」(W. XI, 31) と呼び、両者の対立が鋭くなりすぎるとこの形式そのものが解消されると述べている。それは個別的存在の解消であり、ヘッベルによるとイデーのための「損害回復 (Satisfaktion)」である。そしてそれは「ドラマが達成する最高のこと」(以上 W. XI, 31) であるという。イデーは人間の存在を必要としながら、人間を没落させもする。人間にとってイデーは身勝手なものになり、この意味でヘッベルの悲劇はヴァルツェルがいうように「理性の奸知」<sup>25)</sup> を体現するともいえるのである。しかもヘッベルは人間に対してこのイデーの勝手さを受け容れるように求めている。「個人が没落そのものにおいて全体に対する自己の関係を少しは見通して心静かに退く」(W. XI, 31) ならば、イデーの「損害回復」は完全なものになるというからである。それは個人の「自己止揚のモメント」(W. T, 3158) であり、それを示すことが芸術の目的でもあるという。「ポエジイの使命は……人類をその運命と和解させる」(T. I, 1288) ことなのである。

ヘッベルは1847年の日記に次のように書いている。「人間は宇宙に対する個人的な関係の必然性を把握するならば、その教育 (Bildung) を完成したことになり、そもそも個人であることをすでにやめたことになる。何故ならこの必然性の概念、この概念に何とか達する能力、そしてそれを保持する力はまさに個人的なものにおける宇宙的なものであり、あらゆる不当なエゴイズムを消し去り、精神が死を本質において先取りすることによって死から精神を解放するからである。」(T. III, 4274) ヘッベルにはハイペアのような「神的な Weltenlenker」に対する楽観的な信頼は見られない。しかし上の日記に見られるような「教育の完成」という考え方において生に意義を発見し、ペシミズム的な考えを克服しようとつとめているのである。<sup>26)</sup> この点にすべての価値がゆらいでいた時代の子としてのヘッベルの姿を認めることができると思う。クロイツァーはヴィーン時代のヘッベル (つまり1845年以降のヘッベル) にのみ「世界秩序への resignativ な Sich-Schicken」<sup>27)</sup> を認めているが、しかしそのような思想はすでに „Mein Wort über

23) Vgl. Friedrich Hebbel: Werke (Hanser), Bd. 3, S. 231.

24) Stolte, Heinz: Literaturbericht. In: Hebbel-Jahrbuch 1969, S. 195.

25) Walzel: a.a.O., S. 30.

26) Vgl. T. II, 3191.

27) Kreuzer, Helmut: Friedrich Hebbel. In: Deutsche Dichter des 19. Jahrhunderts. Ihr Leben und Werk. Hrsg. von Benno von Wiese. Berlin (E. Schmidt) 1969, S. 395.

das Drama“ にあらわれているのである (作品の上では 1854 年の『ギューゲスとその指輪』で表現されたとしても)。そしてそれは「教育の完成」という意味において単に resignativ なものを越えた positiv な思想なのである。前述のようにヘッベルは芸術の使命としての生の表現は「生の単なるコピー」ではなされ得ないと考えた。そして更にハイペアのドラマ観を否定してエッセ学者が「『純粹理念』を気分転換のために論文でなくドラマで示そうとする哲学の操り人形の空虚な屁理屈」(W. XI, 38 f.) と非難した。ヘッベルは生や人間を洞察してイデーと人間関係を認識し表現することを重視した。そのためにヘッベルは生や人間に重点をおいたのである。この意味で「芸術は生、内的と外的な生とかかかわっている」(W. XI, 3) のである。

(付記) 本論文は 1978 年 10 月日本独文学会秋季研究発表会(京都)の報告を加筆修正したものである。

## Versuch über Hebbels Dramaturgie

—Hebbels Auseinandersetzung mit J. L. Heiberg—

ATSUSHI OKUMURA (geb. TOYA)

Als theoretische Dramaturgie von Hebbel (1813–1863) sind „Mein Wort über das Drama“ (1843) und sein „Vorwort zu Maria Magdalene“ (1844) wesentlich. In diesem Aufsatz wird daher versucht, diese Dramaturgie Hebbels zu interpretieren. Ich stelle dabei „Mein Wort über das Drama“ in den Mittelpunkt. Der größte Teil von „Mein Wort über das Drama“ ist die Auseinandersetzung Hebbels mit dem bekannten dänischen Dichter und Philosophen Johan Ludvig Heiberg (1791–1860).

Hebbel und Heiberg wiesen beide „das Amusement-Prinzip“ (W. XI, 52) des Theaters und des Dramas zurück. Aber über die eigentliche Aufgabe des Dramas waren sie sich nicht einig. Der Unterschied ihrer Dramaturgie beweist sich zum ersten aus ihrem Gedanken über „das Junge Deutschland“. Hebbel hat Gutzkows Werke ziemlich geschätzt, weil sie „den gesellschaftlichen Zustand“ (W. XI, 8) scharf zeigen. Dagegen hat Heiberg scharf polemisiert, weil „der gesellschaftliche Zustand“, „bloß des Zeitalters untergeordnete Phänomene“ darstelle (A. III, 186). Nach Heiberg soll das Drama „das Wirken des göttlichen Weltenlenkers im Individuellen“ (A. III, 190) zeigen. Das soll auch „die Aufgabe des neueren Dramas“ (so lautet der Titel seiner Hebbel-Kritik) sein.

Die Neigung Hebbels zum „Jungen Deutschland“, wenn sie unter Vorbehalt festzustellen ist, stammt nicht aus der Sympathie für den Staats- und Gesellschaftsbegriff dieser Schule, sondern vielmehr aus seiner Sympathie dafür, daß diese Schule das Leben und den Menschen an sich ohne jede Vorbedingung betrachten und darstellen will. Hebbel hat 1839 Wienbargs „Die Dramatiker der Jetztzeit“ (1839) rezensiert und folgenden Gedanken geschätzt: „Unsere Literatur ist ein Gespenst, . . . Frisches, junges Leben wird ausgesogen . . .“ (W. X, 369). Das war auch Hebbels Meinung. Er hat aus solchem Gedanken Menzels Polemik gegen Gutzkows „Wally, die Zweiflerin“ (1835) abgelehnt. Eine solche Auffassung kann man auch in der Kritik Hebbels über Wilhelm Elias' Roman „Glaube und Wissen“ (1839) und im Motiv der „Judith“ (1839–1840) nachweisen. Dieses dichterische Prinzip Hebbels, vor allem das Leben und den Menschen als Thema zu sehen, kann man schon in seiner Kritik „Über Theodor Körner und Heinrich von Kleist“ (1835) feststellen. Er schätzte Kleist, weil Kleist „die gräßliche Tiefe des Lebens“ (W. IX, 58) verkörpert hatte. „Der Weg zum Dichter geht nur durch den Menschen“ (T. I, 746) war das wichtige Prinzip des Dichters Hebbel. Er wußte zwar, daß „die Welt die realisierte Idee“ (W. XI, 56) sei, aber für ihn handelt es sich weniger um die Idee selbst, als vielmehr um die Welt, die die realisierte Idee darstellt.

Nach Hebbel soll das Drama „Menschen-Natur und Menschen-Geschick“ (W. XI, 34) erforschen und darstellen. Das Drama soll die Wahrheit zeigen, „daß das Leben als Vereinzelung, die nicht Maß zu halten weiß, die Schuld nicht bloß zufällig, sondern sie notwendig und wesentlich“ erzeugt und „daß die dramatische Schuld nicht, wie die christliche Erbsünde, erst aus der Richtung des menschlichen Willens entspringt, sondern unmittelbar aus dem Willen selbst, aus der starren eigenmächtigen Ausdehnung des Ichs, hervorgeht, . . .“ (W. XI, 4). Diese Wahrheit ist „Menschen-Natur und Menschen-Geschick.“ Heibergs Polemik gegen Hebbel besteht darin, daß es für ihn keine Schuld, ausgenommen die Erbsünde, geben kann, die von der Richtung des menschlichen Willens unabhängig wäre. Diesen „verwirrten Begriff“ (A. III, 191) hat Heiberg dem zugeschrieben, daß Hebbel keine Idee des „göttlichen Weltenlenkers“ besitze. Aber nach Hebbel ist der Schuldbegriff Heibergs etwas Spezielles, wie etwa die Sünde des Mordes und des Raubes. Aber Hebbels Schuldbegriff sei demgegenüber der „allgemeine Schuldbegriff.“ (W. XI, 30)

Nach Hebbel ist das Individuum eine „Monade“ der „höchsten Idee“ (W. XI, 27). Das Individuum ist darum bestrebt, seinen Willen, sein Ich maßlos auszudehnen. Darum verstößt der Mensch gegen die Idee. Er wird schuldig und geht zugrunde. Hebbel sieht aber darin „die Satisfaktion, die es (=das Drama) der Idee durch den Untergang des ihr durch sein Handeln



oder durch sein Dasein selbst widerstrebenden Individuums verschafft.“ (W. XI, 31) Hier entsteht eine Frage: Wird der Mensch nicht schuldig, wenn die Idee die Monade, den Menschen, nicht nötig hat, wo sie sich manifestiert? Aber hierauf hat Hebbel „nie eine Antwort gefunden, und Keiner wird sie finden, der ernstlich fragt.“ (W. XI, 32)

Für Hebbel ist in einem Sinne der Grund für das notwendige Schuldigwerden des Menschen nicht so wichtig. Nach ihm trennt „das Böse“ (T. II, 2179) allein den Menschen von Gott. Der Mensch ist schuldig, soweit er überhaupt lebt. Dieser pessimistische Gedanke war seine ursprüngliche Auffassung von Jugend auf. Und Hebbel fordert vom Menschen, daß er sein Verhältnis zur Idee einsieht und „in Frieden abtritt,“ (W. XI, 31) damit die Satisfaktion der Idee vollständig wird. Hebbel besitzt also nicht mehr das optimistische Vertrauen auf Gott, wie es Heiberg hat, aber er bestrebt sich umso mehr, den pessimistischen Gedanken zu überwinden, indem er im Leben des Menschen einen Sinn findet. Diese Bestrebung zeigt sich im Begriff *der Vollendung der Bildung*, den Hebbel in einer Notiz seiner Tagebücher (T. III, 4274) niederschreibt. Der Mensch soll dann in Frieden abtreten.

Nach Hebbel soll die Kunst das Leben begreifen und darstellen, aber das sei nicht „mit dem bloßen Kopieren desselben“ (W. IX, 34) abgetan. Das Drama soll das Leben und den Menschen betrachten und ihre Wahrheit einsichtig machen, dann das Verhältnis zwischen Idee und Menschen erkennen und darstellen. Darum hat Hebbel das Leben und den Menschen als Thema für wichtig gehalten. In diesem Sinne hat die Kunst es „mit dem Leben, dem *innern* und *äußern*, zu tun.“ (W. XI, 3)